

高砂増増抄序

美_レ哉、古_レ樂明_レ德_レ遠矣、当_レ時弁_レ冕端_レ委_レ、以
化_レ民節_{スル}百_レ事者、樂_レ之_レ德也、今_レ也、礼_レ樂_レ廢_レ
弛_レ不能_レ節_ニ宣_{スル}其_ノ氣_ヲ、使_下有_レ所_ニ壅_レ閉_レ湫_{底_{スル}}、以
露_ニ其_ノ体_ヲ、遂_ニ昏_中乱_レ百_レ事_上、甚_レ者、好_レ奇行_レ怪不_レハ
拋_ニ于_レ葱_レ嶺_ニ則_ニ入_ニ于_レ蓬_{瀛_ニ}、雖_レ焚_レ書_{藏書_ニ}時_レ、
豈_レ踰_レ此_ニ耶、於_レ是、有_ニ煩_レ手_{淫_レ}声_レ、悞_ニ堙_レ心_レ耳_レ、
宜_レ乎、古_レ樂_レ之不_レ興也、然_ニ漢_{武帝置_ニ}叶_レ律_レ、
歌_ニ天_レ瑞_ヲ、非_レ不_レ美也、不_レ能_レ免_ニ哀_レ痛_レ之_レ詔_レ、王_レ

莽建_二義_一和_二考_一律_一呂_一、非_レ不_レ精也、不_レ能_レ救_二漸
 台_一之禍_一、晋_レ武帝制_二王_一尺_一調_二金_一石_一、非_レ不_レ調
 也、不_レ能_レ弭_二平陽之災_一、梁_レ武帝立_二四器調
 八_一音_一非_レ不_レ工也、不_レ能_レ道_二台_一城之辱_一、由_レ是_二、
 觀_レ之、樂不_レ問_二古今_一、徒具_二其文_一而意_レ不_レ在
 焉、則礼_レ樂_レ為_二虛_一名也、何足_二以為_レ樂_一、蓋致_二、
 樂以治_二其本_一、則生_二易_一直_レ慈_レ良_レ之心_一、而修
 身及_レ家平_一均_二天_一下_一、古_一人曰、今之_一樂、由_二古_一、
 之樂_一也、此非_レ直_二指_レ俗_一樂_一為_二美_一也、欲_レ使_二人_一、
 君_レ治_二其本_一、本_一立_一、則合_一同_二而_一化_レ、而樂_一興_レ焉、
 豈可_二雅_一鄭_一澹_一雜_レ而並_一行哉、故曰、王_一道盛_二、
 則淫_一樂熄_二、學者當明_二此意_一矣、高_一砂者我
 邦_一散_一樂也。作_レ非_二純_一雅_一、奏_レ降_二五_一節_一、余固_二弗
 取_レ之也、播_一州_一海_一浜_二有_二迂_一臺_一者_一、著_二高_一砂增_一、
 增_一抄附_一錄_一一篇_一、其所_二自_一為_レ說、或攷_二正_一譌_一、
 謬_一、或分_一折疑_一似_一、或論_二古_一典_一、而折_二其衷_一、或
 証_一事_一實_一、而黜_二其妄_一、使_二讀_一者_一瞭_二然_一乎心_一目_一、
 之間_一、可_レ謂_二博_一而精_一矣、蓋迂_一臺_一非_レ愛_二其節_一、

奏_一也、欲_下就_二其_レ辞_一喻_中其事_一理_上。書_一成、属_レ余、余
嘉_二尚_一其秉_レ志不_レ回_{ヨコシマナラ}之意_一以_レ弁_二一_一言_ヲ於_レ篇
端_一云。

浪華釣徒考槃亭主人 撰

(印) 「姓留守」「古廉」

自序

ところにあてところしらさらんはいとくちをしと、身
におはぬやうをおもひいて、ひたふるに此国の風
土をもとむれとも、しやうむのいやしく、さへもみし
かく、よき人のましろひもあらねは、せんすへも
しらていたつらに霜とほしとをとりぬ。ところく
つまむに、たまく高砂のやしろにおよふ。世の人の
すきにもてはやしぬるハ、うたひといふものによれり。
ふるきふみにいふと、おほやうにてまゝことなるもの有。
されたるこゝろよりそのたかひをいはんとて、高砂の

うたひ一篇の句ことに筆を付侍れと、おほろ
けの事なれハ、人にもえいはて醬こんづの蓋ふたにもやなんと
やりすつるを、かたへになにはの人のきたりゐて、
あれは何そととふ。しかくと申に、かの人とり見て、
うたひの抄はたまき、秀次公の関白しり給ふ
ふし、五山の長老めしてかゝせ給ふよし、梅むらか
さいひつに見えぬ。そのゝち、紀路の恵空、法の音と
いふものやまきをつくり、等空も増抄十巻をあみ
ぬ。皆世につたへ侍れと、一時のつくなひにや、山の井
あさく汲てそこの心はしる人のしる。なみくくにはいはす
など、こゝろにくし。ワらはへのために増々抄をのへよ。
さあらん人は、いとまにもとみ、そのワさもかしこからす
は、いかてなしてん。やつかれその器なし。おこの事
なから、たゝ風土のすこしにてもなりおはんことこそほいと
するなれ。しかはあれと、高砂のうたひは、ことはのたへ
にこゝろのめてたき谷水のいはほうちて、こゝかしこ
はなれとひ、くるくるとまひて、ひとつところにあひ
いたらぬくまもなきかことし。いみしとおもひおろか
なるものゝことはせんハ、そゝろさむきあしたの水
さくる心地すめれと、ひとつこゝろしてなすにもあら

す。ものにかふるはを、あしたよつ、くれみつとかそへ
なし、くちはみのあしつくるワさして、かくハしつと
いえは、此ものゝなかにほとり、名所などあなり。いて
行て見んとて袖にし侍れハ、いなひもならてそのこと
葉を序としぬ。

元文万年元年

千秋之初秋

播州高砂 漁甫迂臺題

高砂増々抄

引書

風土記残篇	花山院忠定公記	高砂社記略
神代卷	謡之増抄	揚升菴
歌林良才	論語	万葉集
古今	藻塩草	呉竹集
詞林采要抄	飛鳥井家古今集抄	
古今榮雅抄	長能記	事文類聚
千載集	山海経	朗詠
楽説記聞	根源抄	袖中抄
拾遺集	日本紀	古語拾遺

伊勢物語	太平記	明衡往来	古事談	東鑑	江家次第	歌舞同異抄	説文	蔡邕独断	文献通考	河海抄	事物記原	国史実録	經濟録	附録引書	後選集	本草綱目
常陸国志	義経記	源平盛衰記	宇治拾遺	本朝文粹	古今著聞集	神社考	左伝注疏	兼名苑	楽説記聞	無名抄	积名	源氏物語	日本紀		忠見家集	大宮司家系図
詩経	嘉吉記	禁秘抄	十訓抄	和事始	順和名集	本朝通記	周礼	書経	鞆鼓録	万葉集	三代実録	夜鶴抄	旧事記			峰相記

高砂増々抄	
目録	
高砂謡註	
同評	
天小船之事	
尾上之事	
同鐘之事	
附録目次	
和樂説	
謡文字説	
猿樂文字説	

猿楽原始

同三変之事

弁散楽

能猿楽之事

式三番

猿楽称能

能作者

高砂増々抄

播州高砂 漁甫迂臺 纂輯

高砂 此謡ハ觀世世阿弥あめりといひ伝ふ。実ハ今春善竹
作なり。もとハ相生と号せしを、名を改めかへてうたひ侍り。尤佳作

なり。高砂浦ハ播磨国鹿子郡故事応神紀に出す御厨庄ミくりやのに在。昔天子の御

奉り高砂の名めいしやう蹤世しにいちじるし。往時風波たうように陶鎔いんごうせられ砂高いんごうく

積れる所なれハ、おのづから名付く成るべし。もの換り星移り、或ハ

田でんかん■たはだけとなり遠洲となり、高き砂もなだらかにして今数村となる。

池田 養田 大崎 荒井 小松原 高砂くはしくハ予かあらハす播磨志に見へたり。此謡の

大意ハ、肥後国阿蘇の宮の大宮司友成、上都の次、高砂一覽たための為

経過せられけるに、住江高砂の松の精、丈婆誦本作尉 姥非なりと現れ、相生の

(■ … 田へんに漢のつくり)

松の謂いはれをくハしくかたり、住吉にて待べし、と海士の小舟にのりて帰り
 侍りぬ。友成も夫より住吉に詣て猶奇特きとくを見るよしなり。
 ○今を始のたび衣、日も行末ぞ久しき。何れのうたひにも、
 発端の詞はあたにハなきなり。心をつくべし。是ハたゞ旅の心
 ばかり。衣にハひもあるゆへに、衣、ひも、つゞけたり。今の小袖にハなし。
 昔の装束の事也。今を始といひて久しきとあるハおもしろし。
 初の旅ならば、ちかきも心うかるべきに、行末久しき月日をふる
 ならんと思ひたつさま、言外に哀ふかし。○或曰、いラ日本にて根本
 の仮字といふ。此謡の発語にいまと云出せる根本のいノ字をもて
 語を発す、妙也。それ故にこそ、今日を始といふべきを今を始
 といえる。此意味のよし秘訣ひけつとぞ。

○抑是ハ九州肥後国一。抑は発語、今更に云出せる詞なり。
 九州と八国九つある故也。上古の大八洲おほやしま、漸く割さけて六十六国となる。
 肥後国はもと肥前国と一ツ国にして、火の国といふ。後、両国に
 分て肥前肥後と名つく。昔ハ阿蘇国、葦北国あしきたの、天草国ハ各別
 の国にて、国の造みやづこを定め置れぬ。肥後肥前分てるるとき、三国を肥後
 に加へ、昔の国号をもつて郡名となせり。景行天皇十八年、帝
 筑紫の国を廻り満す。日くれ、岸につくことをしらざりし時、はるかに
 火の光を見て漕行こぎに、岸につけり。彼火を尋給ふに、火をとも
 せるものなかりしかハ、其国をなづけて火の国と云。是世にいふ
 不知火しらぬなり。夫より阿蘇に至り給ふ。阿蘇津彦あそつひこ、阿蘇津媛あそつひめあら
 はれて、帝にまみゆ。是、健磐龍命たけいはたつのみこと、八神武帝孫草部比売命くさべひめのみこと、磐

龍夫の靈にして今の阿蘇大神なり。此時帝一健磐龍の孫惟人
人 國造速瓶はやくめ 王命の子に命せられ、社を建、祭祀を司らしめ給ふ。大官司、是より
 はじまる。神主ハ即大官司なり。神胤なるゆへに、代々二位三位に任す。
 友成、此度阿蘇を立出らるゝ本意ハ、都見物との子細をいふ也。
 未都を見ずと云詞、今を始と云に応す。

○又よき次なれハ――。松の精にあふもとをいひ出す也。播州
 ハはりまなり。はりまといふに説々有。むかしハ萩をはりといふ。萩
 多くはえたる国なれハはりまといふ。又、神功皇后三韓征伐
 し給ふ時、此海の辺を通り給ふに、霧のはれまに此国見えし故に、
 霧のはれまの国といふ心と云。又、皇后御裳のほころびたるに
 針を求給ふととゞまり給ふ所なれハ、針間といふ。又、風土記
 残篇にハ、国の形容張弓のごとし。因て、はりゆミの国といふ意なり。○
 或曰、はりまの説、針間を本説とす。予曰、風土記の説、本拠とす
 べし。一見ハたゝみる也。一の字、しるての心なし。
 ○旅衣すゑはるく――。高砂迄の船中の体也。はるく――とハ
 遙の字にて、遠き心也。衣ははるものなれハ、いひかけたり。○けふ
 おもひたつとハ、内々望なれども遠き所なれハ、やうく――けふ思ひたつと
 なり。けふといふ訓はけさの日といふの略、ひ、ふ、通へる也。立といふも
 衣の縁語なり。○舟路のどけき春風とハ、のとか成春のけしき心
 にかなふ体なり。

○幾日来ぬらん跡末もとハ。阿蘇をいてゝもはや幾日来ぬらん、
 古郷は跡に成、また行末も遠しと、いとゝ旅情をいたましむる

体也。いさといふ詞、清と濁と両義有。清すむときハ不知しらずといふ枕詞なり。にぐる時ハさそふ詞になる也。此処にてはしらず、といふの枕詞なるをいさしら雲といひかけたり。雲とは行末こしかたともに雲井に見ゆる心也。さしもハすべてつよき詞也。肥後国より高砂の浦迄ハはるく遠きさかひなれとも、さしもにおもひし事なれば、最早つきたりとよろこぶ体也。着にけりくとおし返しうたふハ、悦のふかき也。催馬樂さいばなどにかく返してうたふ。朝倉返あさくらがへしといふ也。○此段一くさりに遙の語二ツ有事、是陰陽の意なり。末はるくといふハ陰也。白雲のはるくといふは陽也。是秘事なりとぞ。

○高砂の松の春風ふきくれて――○松の精の詞なり。所のありさまをいひのべたり。高砂の松の春風吹暮てとハ、夕暮の気色なり。吹暮てと云にて、終日吹たるをながめをりて、夕の鐘を聞感かんをおこしたる体也。身の老をいはん為なり。さるによりて夕暮のけしきをいひ出せり。○浪は霞のとハ、春の海辺の景色なり。霞の立かくして波の音ばかり聞ゆるハ、汐のみちひと知るよし也。夕暮の鐘の声、霞にもるゝ波の音、おもしろき夕へのけしきなり。○誰をかも知る人にせん――○藤原興風歌也。古今雜上巻に出す。心は旧友も皆むかしになりて高砂の松ならで昔の物なし。されとそれハ昔の友にてなけれハかひなしと、旧友をしたふよしなり。誰をかものもの字、休字にしてしかも心もちたるてにはの文字、味ふべし。興風か老の身をいひのべたる歌を吟詠したる也。

下への詞つゝきのために、友ならでといひかへたり。○過こし世々とハ過
来りたる世々を知れる老人と也。雪の縁語にて、つもりく／＼と
つゞけたり。世々をつもりたる老人と云て、鶴は年久しき鳥なれ
ば老人にたとふ。ねぐらとハ鳥のふしと也。老ぬれハあゆミも心にま
かせねハ、ねぐらに残るとよそへていへり。有明の春の霜夜とハ、月
影を霜と見たる也。夏夜の霜など詩に侍り。霜ハをくものなれハ、
跡へいひかけたり。○松風をのミとハ、常住坐臥に松風を聞よし也。のミ
とは、かぎる詞なり。心を友とすか筵とハ、老人は友なけれハ夫婦互の心
を友とするを、すかといひかけたり。前に云、誰をかも知る人にせんと云詞に
応す。昔筵はすけと云、草にてをりたるむしろ也。筵ハのべしくもの
なれば、懷をのぶるによそへて云なり。

○音信ハ松にこととふ——。音信るゝものとは、松にこととふ浦風は
かりとなり。音信ハのはもじにて、外にとふものなきよし聞えたり。かやうの
てには、心つくべし。松と待と兼て、下にこととふと云なり。落葉衣ハ何
等の衣にや、未考。但し一説にアイウエヲ喉音
カキクケコ牙音通用の音なれば、若くちは
衣の事にや。めで度文句なれハ、朽といふを嫌ふてかく書るなるべし。
花山院忠定公の記に云、表ハ緯ぬき紅たて経たて黄の織物なり。裏ハ黄色の平
絹を用ゆ。按ずるに、紅と黄と経緯たてぬきの織物ならば、松のかれ葉色な
るべし。落葉衣といふ物、装束にハなし。

○所ハ高砂の——。身の老たるよしをいふ也。年つもりてハおもて面しは
む事を、老の波よると云也。朗詠に大公望逢周文二渭浜ノ波ム疊二面二と
有。落葉ハかく物なれハ、かく成迄といひかけたり。如し是久しくながらへしに、

なをまた行末いかばかり成んと也。生の松とハ、筑前の名高き名所に
て、代々の集に歌多し。それもとハ生の松原をさすなり。
○里人を相待所に老人――。友成、松の事を尋度おもふ
折ふし、案内者を見かけよろこぶ体也。

○こなたの事にて候か――。夫婦のこたへ也。始に我身の事かと
問ひ、後にその子細を尋るなり。

○高砂の松とハ何れの木を申候そ。名高き木なれハ尋る也。

○唯今木陰を清め候――。夫婦の答なり。清候と云詞、心
をつくべし。此謡一篇の綱領也。高砂社記略に曰、往昔高砂
の松といふは、大五尋にして、雄松雌松二幹と成。雄枝ハたゝちに
のぼりて操なる陰天をおほひ、雌枝はまとかなる翼地にひらき、
又のぼりて地につき、良のかたの枝、其梢連理となり、緑の色地に敷り。ひ
とへに龍蛇の蟠るに似て、孫枝の茂れる廿余丈にみたり。社記略及
靈松の図、高砂社官小松氏の家に有。求て見るべし。

○高砂住江の松――。住江と云は住吉といふと同し。○よしを
反せば、ゐとかへる。ゐとえと通音なり。すべて和訓伝にて、よしと
いふ詞を皆えとよむ也。神代卷あなにえの御詞も、あなよしとの義也。
日吉をひえといひ、吉方をえほうといふも同し。○友成、問なり。相生と
いえハ一所に有べきに、遠く隔て住ハいかでぞと不審したる也。
○仰のごとく古今の序に――。おきなのことふる詞なり。友成の仰
のごとく、古今の序にあるとなり。相生といふ事、秘祝にてみだりに
云伝えず。相生の松といふに、別に予が愚意あり。其弁後へにしるし

侍りぬ。○尉ぜうとハおきなのの自称なり。増抄に老人の号といえり。予云、尉は老人の号とハいづれの書によれるや、いふかし。字書を考るに、尉、長老の義なし。尉ハ未の韻、紆胃切音、畏い。安也。従レ上按レ下武官悉ッ以為レ称ト。揚升菴曰、字从レ尼ニ、尼音夷平也。後世、軍官曰ニ校尉ト、刑官曰ニ廷尉ト、皆取レト。従レ上按レ下使レ平之義ニ、云。本邦にて衛門府の判官をいえり。六位の諸太夫、源平重代の侍、殊に其品を扱て是に任ぜらる。後鳥羽院の時、和田小太郎義盛左衛門尉に任ずる類なり。尉を老人の号とせる事、見当り侍らず。予、寡聞くぶんなる打つけにハいひがたけれども、おそらくハあやまりなるべし。尉、当レ作レ丈ニ。丈は長老の称なり。師古曰、嚴莊げんじょう之称故親ニシテ而老トスレ者皆称焉スといへり。○或曰、本朝の読くせにて、允ぜう、掾せう、尉ぜう、みなぜうの音によびならはす朝廷の故実なり。尉は五位なれば、長老たる人を称して敬ひよぶの名にせしならん。市町にても、若けれども其長を宿老年寄とよぶか如きか。此説穩ならざれども、参考に備ふ。○津の国住吉。津国とは、摂津国、高津国といふべきを略していふ也。今の難波なり。天下着船の津なる故に、諸の津港しんこう撰ニ于此ニの意にて、撰津と云。又、高津と云ハ、天照太神の御孫初はつて降臨かうりんの地なる故に、尊て高津と云也。○住吉とハ、明神、神功皇后に、すみよしますミよしの国なり。こゝに跡たれんと神勅有しより、所の名とす。是成姥とハ、うばハ高砂の人、所の人なれハ、知る事ハ申たまへとなり。此段ハ、住吉高砂の明神現形げんぎょうし給ひて友成に逢給ふよしなり。

○ふしぎや見れは――。友成いぶかしくおもへる体也。老人

夫婦、一所に有ながら遠く隔^{だて}て住とはいかゞおもひはかられぬと也。

○うたての仰候や山川――。一条禅閣歌林良材に、うたてとハあまりにといふ心とあり。予、いづれの書にてか薄情とかけるを見侍りけるが、書の名をワすれたり。薄情などの心ならば、此詞に合べし。あまりの心にてハ、のりがたくやあらん。いもせの道ハ夫婦の道なり。山川万里を隔れとも、夫婦相あふ中に遠しといふ事なしと也。是ハ論語子罕^ハ篇に、孔子逸詩の詞を引て、唐^レ棣^ノ華^ニ偏^{トシテ}、其^レ反^{タリ}而^レ豈^ニ不^レ爾^ヲ思^ハ、室^ハ是^レ遠^シ。子^ハ曰^ク未^ニ之^ヲ思^ハ也、夫^レ何^レ遠^キ之^レ有^レ、○と云を下心にふみて書たるもの也。夫婦互^ニ相おもふ情の切なれハ、遠しとハおもひ侍らずとなり。

○先案しても御覽ぜよ――。是は、おきな友成へいひかけたる詞也。友成のいぶかしくおもへるをさとす詞なる故、先思案して見給へと心をつくる文勢なり。

○高砂住江――。板本、非精に作る、あやまり也。非情なり。心なき松だにも相生といひて高砂住江したしむ名有。まして人なるをや、となり。夫婦ハ化人なれども、人の事になして答るなり。姥の字、婆に作て可なり。姥は麁の韻、奠補切音、母、老母也と註せり。姥といふは、すべて老女の称なり。婆ハ歌^ノ韻、蒲禾切音、鄙、老媪之称と註す。翁婆と連読する也。松諸共に此年迄相生の夫婦なる物を。此段文字つかひ意味有事なり。心をつくべし。頭に我等夫婦は松の精なりとはいはねとも、夫婦ハ化人なる事をいひ出す文勢なり。なる物をと云。○を文字、跡へかへすてにをはなり。

○謂を聞は面白や——。此段、友成の詞なり。夫婦の答へ、尤也。相生の松の物がたり、此所にならハせる事なきかと、又とふなり。

○昔の人——。夫婦して、昔の申伝へたる通りをいふ也。

○高砂といふは上代——。古抄に時代相違なりと有。予按るに、万葉集高砂の松をよめる歌なし。夫故に古抄に時代相違と註せりと覚ゆ。万葉集は聖武の御女、孝謙の御時、天平勝宝五年、井出の左大臣橘諸兄勅を請て撰する也。一世に首尾せずして廢帝、称徳、光仁、桓武、五代過て平城の御時、撰をハリて大同三年に世に流布す。古今集真字序に、昔平城天子詔シテ侍臣ニ令撰ニ万葉集ヲ、自尔以来時歴ニ十代ヲ、数過ニ百年ヲとかけり。平城治世四嵯峨十四淳和十仁明十七文徳八清和十八陽成八光孝三宇多十醍醐在位の後九年、合十代年百一年也。古今集ハ万葉集より百年計後の撰也。万葉集に住吉の歌ハあれとも高砂の歌なし。故に時代相違と古抄にかけりと見ゆ。此謡作者の意をむかへ考るに、高砂の松はふるき名所といはん為に、上代の万葉集の古の義といえるなり。すでに、古今集、高砂の松をむかしの友とふるき事によミたれハ、万葉時代の名所たるにけぢめハあらじ。たま〜万葉集に高砂の歌を脱せるものと心得べし。是ハ高砂の事をうばのいへる答へなり。

○住吉と申ハ今——。延喜ハ人皇六十代醍醐帝の年号なり。上に御代といひ下に延喜の御事といへる、何とやらん。延喜といふか帝の御名のやうに聞ゆれども、寛平法皇なんといえる

同格にて、延喜年中の帝といふ事也。○増抄に、松のいはれを答る詞也。心は明なりと有。しかれども、此処謡一篇の眼骨がんこつにて、中々心安くきこゆる所にあらず。元来友成の問ハ、高砂住吉の松のいはれ聞度との義也。しかるに答こたは松のいはれにハあらず。この所、文義いひとりにくき処なり。是ハ丈の答也。○住吉といふハ今此、延喜帝聖君にてまします故、民くさもおのがさまくおひしげりて住よしの代やと和訓によそへて答たり。夫故、うばのいえるも、松とはつきぬことのはと松の千とせを、御代のつきぬに比していへり。全体此うたひは、聖代を祝して万物各其所をゑたる事を一篇の主意にして作れりと心得べし。

○栄へハ古今相をなじり。○此古今といふは、上にいへる上代の万葉集の古の義といふと、今此御代と云にかけていへり。

○能々聞はり。○友成、会得せられたる詞也。不審はるゝといひかけ、春の日の光和くとハ、春日のおだやかなるをいひて和光同塵の意をふくめり。○住吉ハ、西海の櫛か原より顕給ふ神なり。故に出現の本を云なり。

○かしこは住吉こゝハ高砂り。○友成、ふしんなく丈婆夫婦の詞に同心したる体なり。

○四海波り。○四海とは四方の海なり。海といふより波静といふなり。四海の内皆兄弟也、などありて、天下をさして四海と云。国外四方皆海なる故也。波静とは大平との義なり。○時つ風とハ時をたがへぬ風也。つハ休字なり。大平の御代、風もよき

ころに吹て枝をならさぬとぞ。風不鳴^レ条雨不破^レ塊^{ツネクレ}といふ古語を
ふみてかけり。遠き四方のはて迄も辺塞^{へんさい}のそなへもいらす、なか
つ国よく治たる時といふ義なり。

○あひに相生——。相応したるといふ心なり。伊勢か歌
に、あひにあひて物おもふ比の我袖にやどる月さへぬるゝかほ
なるとよめり。父子あつく夫婦むつまじきハ家の肥^{こえ}たると
古人もいふめれハ、松こそ目出度かりけれといふ。まことにむべ成哉。

○実やあふぎても——。実やとハマことや也。仰ぎてもとハ、
孔子の徳を顔子の讃せることば、是を仰げはいよく高くと
いへる意にて、延喜帝の聖徳を言葉を以ていひつくさんハをろか
なる事也。中く言語にのべがたきと也。かゝる御代に住民こそゆたか
なれ、君のめぐみのありがたきよとくりかへしいへるは、よろこびの情
ふかき也。内にうらめる女なく、外にむなしき夫なし。夫婦の和、瑟
琴を弾^{ひく}がごとしなど、大平善治の事にいえハ、相生の徳いふも更也。
猶々高砂の松の謂^{いはれ}委^はく御物語候へ。猶々とは一段事のすみ
たるに、そのうへを押返しいふ詞なり。世話にいふ猶々と相違
なし。おもひくらぶべし。

○夫^{それ}草木心なし——。夫ハ発端辞也。端を改て新にいひ
出す時用る字なり。花実時をたがへずとハ、春花咲、秋実の熟す
るをいふ。陽春の徳を——。とは陽春發生の氣に応じ
て自然と花のひらくをいふ。南枝花始とは、南ハ陽のかたなれ
は暖にして、一本の木にても南方の枝ハ早くひらくとなり。二

条殿文会の序、保胤やすたねの句に南枝北枝之梅開落已異なりと作れり。其外、南枝開早北枝遅など作れり。

○然ども此松は――。然ともとハ、上をうけて下を転ずる語なり。たゞ松と斗いはず此とさすハ、前に云、唯今木陰を清候松といふに応ず。松の常磐きよめなる徳をいはんとて、先、栄枯有る木の徳をあげて、然ども夫より此松は、とはり合ていふ。筆舌老たり。○とこしなへとハ、長の字を書ッ。不変の義をいふなり。花葉時をワかすとハ、梅や桜のことく花の咲時、葉の落時とわかる事なく四時同し事となり。○一千年の色雪の中にふかくとハ、春色めきたる木も、秋風立は落葉して枯木のことくあさましく見ゆるに、此松ばかりハいかなる嚴冬げんとうの雪のあしたにも其色をたがへず、一千年経ても青々とあるとなり。○一千年の色雪中に深といふ源順詩句なり。

○又ハ松花の色――。松花十かへりといふ事、いづれの話によれるや出所考へず。藻塩草、呉竹集などに、松は千年に十回花咲よしいへり。然ども何と云故事によれりと云事なし。しれるもの希まれなり。識者に尋ぬべし。

○かゝる便を松かえの――。かゝるとハ、如此也。便とは、字書に便ハ宜ぎなり、安あんなりと註して、俗云、勝手よき事なり。是よりそろく松の精なる事をいひ出すなり。心をつくべし。聖代には万物皆其所を得て、各其性をとぐるなり。五風十雨とて雨風も順なれば、水旱風のいたミもなく、おのがまゝに生きかゆれば、

如此なる心安き時節を待得たりといひかけたり。○ことの葉草とは詞の端也。言葉とハ、音をかりていふなり。葉といふによりて草とつゞけ、草といふより露といひ、露といふより玉と云、みかくといふなり。皆縁語にていひつゞけり。是ハ古今の序に、やまと歌は人のこゝろを種として万のこのの葉とそなれりける、と書るに
よれり。

○生としいけるもの――。是も同しく古今の序に、花に鳴鶯水に住蛙の声をきけはいきとしいける物いづれか歌をよまざりける、といふをふみてかけり。こゝにいふ心は、非情のもの迄も聖代の恩沢を蒙らぬはなし。まして生有もの天か下しろしめす帝の、おほんめぐミにもるゝハなしと也。敷嶋とハ大八洲敷及ぼすの号よりして日本の惣名とす。但し歌書ならでハ敷嶋を日本の号に用たる例なし。もと敷島の道といふは、二尊国家経営の道をいふ。今、転用して歌道をいふ。玉銚の道といふも、国家経営の道にして神道の事なれとも、転用して道路の枕詞に用ゆ。其義害なし。一説、詞林采要抄に、磯城島ハ大和国の名所也。崇神天皇、欽明天皇、敷嶋に都し給ふ故に日本の惣名とせり。大和を日本の惣名とすると同じといへり。○是、聖代にハ万物各其処を得て性をとぐる故に、自然と各歌謡を発する理有事をいふ也。

○然に長能――。長能ハ大織冠鎌足公十四世の孫也。長能か詞、何の書に出たるや見ワたり侍らず。然ども、飛鳥井家古今集抄に此詞をひけり。おぼろけにはあらし。○有情非情板本有精非精に作

るあやま
りなり
の其声皆歌にもるゝ事なしとハ有情のミならず、非情の
ひゞきも一切万物の声皆歌になきハなしと也。歌ハよきにつき
あしきにつき自然といひ出すものなれば、万物皆物に感じて
其声を出す。是歌なり。東坡か溪レ声即是レ広レ舌といえるも、
此心に叶ふべし。有情非情の其声皆歌にもるゝ事なしといふ
か綱領也。是より以下草木土沙、風声水音、春林の東風、秋
虫の北露、皆有情非情と云中にこもる事なれども、一ツく皆歌
をよむ目をいふなり。

○草木土沙風声一一。万物といふ中には草木土沙風
声水音までもこもる也。東風といふに対して北露といふなり。北
ハ陰のかたなり。陰のかたはさむし。さむければ露多くおく。故に北
露といふ也。然ども北露といふ語めづらし。東風に対して云たりと見
ゆれとも、いぶかし。古今榮雅抄に云、一切の生類ハ五行の体とす。
その声、皆五行のひゞき也。歌の五句ハ五行也。されハ生類の声を
歌といふ。長能か記にも、和歌はこれ五行の体をことハリ出す。
春の林の東風にうごき、秋の虫の北露に鳴も、皆これ和歌の
体也。有情非情ともに其声皆うたなりといへり云。
○皆和歌の姿ならずや。姿ならずやと云詞、心をつくべし。万
物の声皆歌なれども、其声は物に感ぜねは出ぬなり。前にハ
其理を論ずる、故に皆歌にもるゝ事なしといふ。爰には、すでに
もの感じて風に林のさつくとなり、露の虫のりんくくと声
ある処を指ていふ、故に皆和歌の姿ならずや。すなハち和歌

の姿なり、とつよくいふなり。此やもじ、反語のてにはなり。

○中にも此松は――。前に然ども此松ハといひ、爰に又中にも此松は万木に勝れてといふ。反覆くりかへしいえども自然と其煩しきを覚へず。筆舌妙なり。松の柏のとて雪霜にしぼまぬ徳ハ松に伯仲あいにたるものあれども、松の万木にすぐれたるハ、先其形かたち十八公のよそほひありとなり。松といふ文字を分れハ、十八公となる也。装の文字おもしろし。是には故事有事なり。事文類聚後集卷二十一云、吳、丁固、為尚書、夢松生其腹上。謂人曰、松字乃十八公也。後十八歳吾其為レ公乎。卒如夢焉。

○千秋の緑――。千年相同じく、古も今も色かへぬとなり。古今の色を見すと云。○すもじ清濁あり。清すむときハ色をあらハすと云心なり。又、濁にごる時ハ不変の色をいへり。両説相通といえども、清音の方ならひとせり。見ハ形旬切頭なり。

○始皇の御爵――。是は松に爵位しやくゐある事をいふ也。事文類聚前集卷十三云、秦始皇上泰山。風雨暴至、休於樹下。封其樹。応邵曰、得二五松一、封レ為五太夫。高砂の尾上の――。此歌、千載集に出す。前中納言匡房の歌也。山海経曰、豊山有九鐘焉、是知霜鳴。郭璞註云、霜降レ時ハ則鐘鳴、故言知也。物有自然感応、而不可為也、と云。尾上の鐘を豊山の鐘によそへてよめる也。いふ心は、松に霜のおくといひかけ、鐘の音する程に霜のふかく置たるよし也。誠なりとハ、古今の序、松の葉のちりうせずしてまさきのかづらながくつたハリと有か、まことなりと也。正木のかづら。大和本

草曰、其葉、花実ともにまゆミに同し。只、其かつら甚長し。皮の内に糸有、まゆミのごとし。漢名しれず。是杜仲とちゆうの別種なるべし。まゆミを正木と云。蔓生まんせいと木生とのかはりにて、一物のことし。和語に長きといふ枕詞にいふなりと云。余は心明なり。

○実名をえたる松枝の——。是ハ友成、丈婆夫婦の物語、容貌ようぼう威儀いぎを見てたゞものにあらずとおもへは、其素性を尋るなり。

○今ハ何をかつゝむべき——。夫婦、爰にて始て松の精にて有よしあかすなり。伊勢物語に、おほん神けぎやうして、とあるを本抛ほんことせり。けぎやうとは現形と書く。神体のあらハれ給ふ心也。住吉明神ハ子細有て和歌の道を別して守り給ふ御神なる故に、此謡に和歌の故実をだんくいえり。此義口訣くけつなり。

○ふしぎや——。心明なり。

○草木心なけれども——。聖代の化くわによりて万物各其所を得たるよしをいふなり。是迄ハ高砂にての物語也。住吉にて待べしとて、丈は住吉へ帰りける体なり。

○高砂や——。友成、高砂より住吉へ参詣、船路の体なり。波の淡路とハ泡あわといひかけ、遠く成といひかけたり。皆縁語を用て舟中の名所をいふ。○是迄道行三ツ有て、始の道行、舟路なり。中入も舟路にして是亦同じく船路也。かく三ツともに船路なる事、是を住吉の三神にかたどり、三を離火りくわの火として水をゆく事、火しづめの祈禱きたうなるよし、始の道行表筒男うはづ、中入道行中筒男、終の道行底筒男、是秘伝なりとぞ。

○我見ても久しく成ぬ——。此歌、古今集十七詠人不知と有。伊勢物語にてハ、いづれの帝か住吉へ行幸の時、業平の歌とす。歌の心は明なり。○姫松、姫は本朝にてうつくしきをいふ詞なり。ひめとハ日の女といふ事にて、神道にて称美に用ゆ。此例をいはず、大和の佐保山をさほ姫といひ、龍田山を龍田姫といふも、山の景色のうつくしく女のけハひたるによそゑていふなり。しかれども佐保姫、龍田姫は連歌家の伝にて神祇にあらず、地名によらず、たゞ春と秋との神といふ秘説あり。姫松とは松のうつくしきなり。

○むつまじと君ハしらずや——。此歌、神体あらはれたまひ、業平に神勅有し歌とす。しらずやとハ、しるべき物をといふ心なり。瑞籬とハ久しきと云枕詞也。久しき世より祝ひそめてきとハ当社垂跡すいしやくの事なり。伊勢物語には、むつまじと君ハしらなみと有。爰ハしらずやといひかへたり。心は同し。久しき世より祝そめてきといふを、下のつゞきのために久しき世々の神かぐらといひかえたり。すゞしめとハ、はらひきよめ神をいさむるこゝろ也。宮づ子とは、宮奴と書て神人の事なり。

○西のうみ——。ト部兼直の歌に、西の海や櫛か原のしほぢよりあらはれ出し住吉の神、とよめるに依ていへり。是、住吉明神出現の本をいふ也。むかし伊弉諾尊、日向の小戸橋の櫛か原にて御祓ミそぎし給ひし時、表筒男うへつとを。中筒男。底筒男。とてあらはれ給ひし。是即、住吉三前の大神にして、伊弉諾尊心一化神也。神功皇后三韓かんを伐給ふ時ハ、

住吉の三神御船守護神にて、新羅の国をしたがへ帰朝の時、今の津の国住吉の里に宮居し祝たまへり。夫より神功皇后も同しく祝ひ奉りて住吉ハ四所と申なり。

○春なれや——○朝香瀉あさかハ住吉の名所也。万葉集にハ浅香浦とよめり。増抄にははりまの名所とあれども、此所ハ最早高砂を出て住吉に至りての事也。残の雪のあさかがたとハ、春雪のきえてあさく成たるを名所によそへていひかけたるなり。

○たまもかる——○住吉の景色をいふ。玉藻とハ藻の緑みどりにうつくしきをほめて玉藻といふなり。玉は美称なり。

○松根——○是ハ橘の在列ありつらか子、日の序の句也。本朝文粹第十一出す。名句なり。故に四条大納言公任卿の朗詠にも此句を出せり。摩レ腰とハふれたづさふる意なり。千年のみどり手に満とは、松を折、或ハひきて手にもては、千とせの緑掌にありといふ也。梅の枝を折てかぎせは、花の散りかゝりたるか二月の雪の袖にふりかゝる心地なんすといふなり。

○有難の影向や——○影向とは神の来臨し給ふをいふ。住吉明神の出現し、舞給ふよしなり。

○実さまく——○舞姫とハ乙女なり。声もすむとハ夜の更る心有、住よしといひかけたり。松かけもうつるとハ、住吉の海面に松の青き影うつりて青ければ青海波といふ也。青海波ハ盤渉調の楽なり。楽説記聞曰、この舞の終りハ詠曲有。舞台を垣かきしろのことく立廻る事有。夫を垣代といふ。其中にて舞也。堂上地下、相交舞。装束ハ表袴紋小葵。

○還城樂。同云、乞食調の曲。この樂ハ還幸に用るなり。舞樂の時ハ蛇を持って舞なり。

○小忌衣。山藍あゐといふ草にて染。近比、大嘗会の節、此諺議ありけるよし。草、熊野、奥より出るとなん。神祇の淨衣なり。

○さすかひなにハ。手てをさしのばす事なり。おさむる手とハのばしたる手を前へおさむる也。のばすもおさむるも、舞曲の形容なり。

○千秋樂。同云、盤涉調の曲。漢文帝の作なり。民百姓ハ田をつくりて秋に縁有、故に千秋樂に民を撫といふ。撫とハ、撫育とつゞきて安ずる事なり。

○万歳樂。平調の曲。隋煬帝すいの作なり。又、日本にてハ用明天皇改作り給ふと根源抄に出す。万歳は命をのぶるに縁有、故にかくいふなり。

○颯々。とは松風の声なり。

高砂謡評

予按するに、此謡は古今集の序に高砂住江の松も相生のやうに覚えとあるを、夫婦陰陽和合の事にとりなし、住吉高砂夫婦の御神とす。然ども序にいふ心はさにあらず。和歌の吟科ぎんくわたる国々の名所をかぞへいふに、住吉高砂ともに名高き松の名所なれハ、同じ事をくたくしくいはんも無下なれば、両国の名を呼出て松の名所たる事を兼云たる迄の事也。住吉高砂あづからず、相生

のやうに覚ゆとは、同時代より相生たる松となり。高砂住吉神社共に
神功皇后の草創

相生の文字を見あやまてるなるべし。序にいふ前後の文字を考
見るべし。延喜を以て当代とせるハ古今集延喜五年の撰にて、其
序に相生の事有に就て附会ふくひせるなり。住吉明神、高砂明神、夫
婦也と作れるにも少すこし抛よりせ有リ。頭昭か袖中抄に、或ハ三輪明神、住
吉明神のおほんもとへ通ひ給ふ間に、住吉のきしも世さらんもの
故に、程なくや人にまつといはれんと読給へる歌を、拾遺抄に
住吉明神の神託とするしたれハ、三輪明神はおとこ神にて
おはしますと聞ゆ、住吉明神は女神ときこゆ。又、我か庵ハ三輪の
山本こひしくハとふらひきませ杉たてるかと、此歌を三輪明神、
住吉明神にたてまつり給へるとまふすめれハ、三輪を女神と
可申敷。両社の男女不審なれば、とかくまうしかたし。思へは神慮難計
事、あたしくしく定申すも、かけまくもおそろしき事なりと云。此
説、無なき稽かんがへの妄談也。筒男つゝをの文字にて男神たる明なり。神詠も偽
作さくなるしるべし。恋しかよふなどの事、神をあなづりけがすといふ
べし。三輪明神ハ大己貴命なり。日本記、古語拾遺、其余実録
の記する処然り。大己貴命ハ素盞鳥の御子にして、其勇武
あげて国史に有。かくれなき男神にして地下武将のはじめなり。又、
高砂明神も延喜の比ハ大己貴命をあかめ奉る。延喜年中より
五十余年後、円融院の御宇、天禄三年、神感かん有て素盞鳥尊、奇
稲姫命並祭三神を相殿とすと社記に見えたり。しかれば高砂
明神も三輪明神一体の御神なれハ、かり設て然しかいへるにや。松と

杉と遠からぬ縁なり。又、本草綱目_ニ曰_ク、千年松樹四辺枝_一起上_一抄不_レ長如_シ偃蓋_ノ。其精_一化_{シテ}為人_ノ其寿千_一歳_云。此等説につきて製造_シしたるもの歟。すべて物語謡曲の類ハ青史実録とは事たがひて、おもしろく文_ヲなし作るを専とするなり。あやとすべきにあらず。しかあれど或ハ仮_カを認_メて真_トし、真_ヲを斥_シて仮_トするを病てしかいふのミ。分て高砂の謡は目出度いでき一句の忌_ミべきなし。故に百番の巻頭とし、王公といへども献酬_ノの礼_ニことには是を賦_スしてことぶき給ふ。又むべならずや。

○或問_テ曰_ク、大_一宮_一司家系友成といふはなしと聞り。大宮司の家系略聞事を得んや。予答_テ曰_ク、大宮司は、景行天皇惟人を神主に命し給ひてより、惟人の末葉、後鳥羽帝建久年中迄在職す。此時の神主を惟泰と云、惟泰より惟次、惟義、惟景、惟助、惟国と相続し、惟国年比官軍に属_スし、軍功有_リ。殊更、其子惟_一直、惟_一成多々_タ良浜_ノの合戦に討死せしかハ、其勲功_ノの賞として後醍醐天皇より二箇所の領を充行る。此時、大宮司領内に城を構る事二十ヶ所とかや。子孫段々繁栄し、天正年中惟豊の時分、今の高にして凡三十万石余を知行せり。秀吉公九州征伐の節、段々おとろへ惟豊も卒去し、其子惟光、惟善、幼稚なる故、後室方より小宰相といふ女を使としてなげきしかハ、惟光に新知三百町を充行るゝ旨御書を賜りける。家臣甲斐守大にいかり、纒_ヲ三百町見るも中々奇怪なりとて、彼御書引やぶらんとしけるを、後室やうくとなだめてとりおさむ。後、はたして武蔵守反_ハ

逆にくみせしかハ、阿蘇家いよく衰微の基となり、文禄二年に惟光も殺害せらる。惟光時に十三歳なり。加藤清正、朝鮮より帰陳の後、惟光罪無ふして死せるをあはれミ、秀吉公に訴へ、舎弟惟善に本領安堵せしむべしと議せられけれども、秀吉公も薨去なれハ、清正私に知行をあたへ、散乱せる社人を集め、廃たる祭祀を興し、神職をつとめしむとかや。無用の弁なれば、くはしくハ記さず。此謡、もとより作物語なれば、作者意ありてワざとなき名を記せり。阿蘇代々、惟の字通称なり。或は阿蘇家譜に惟成といふ人有故に、友成ハ惟成の書あやまりなり、改るよしと云人有。非なり。惟成は大平記時代の人にて、今此延喜の御代といふにあはず。或曰、昔の謡本には我事也の三字なし。その故ハ、むかしは阿蘇の宮の神主共なりとうたふ。但し友成といふ者、神主の系図になし。されは、神主共つれだち出る体ゆへ、能に三大臣出る。是、尤証とすべしと。此説穩ならざれとも参考に備ふ。

附録

天小船○長田村より三丁^{本中}坤の方、圃中にあり。石長五尺四寸、幅二尺四寸、往時ハ天の岩船といへりを、世、高砂の謡に依て天小船と云。峯相記云、日向大明神^{加古郡北条郷大野村}養老元年彼国より岩船にのり、容顔美麗の女体侍女多召具、

加古の浦に坐と云。此説によれ八日向明神の乗給ふ船とす。土人のいふ処は住吉明神の船とす。謡曲にうたふハ岩ふねとハきこえず。只、汀に有漁夫の船と聞ゆ。○或曰、神代卷、蛭子を天の岩樟くす船にのせて風のまにくはなちすつといへるも、樟木にて作れる船なり。官物故、天のと云。岩樟船といふハ堅固の義を祝しいふ也。岩とはかたきたとへなり。石にて作れる船とはあらず。土人、神靈奇怪にほこらん為に作りなせるもの歟。予曰、石や岩を名付てむかしの岩船なりとする事、穴かち神の奇怪にほこらん為に云事にもあらず。神道に一種の意義あり。丹後に天の橋立あり。この橋は神代に諾冉なごなまの二尊立たまふ浮橋、大そらより落て今の丹後の天のはしだてとなりぬると伝ふ。浮橋ハ造化陰陽のかよひぢのある事をかたるなれハ、何ぞ形体あらん。しかるに落てあるととくハ、実は落されども古儀を形にうつし名付て、浮橋のことワリを後世までもわすれざらしめんがためなればなり。これを以て見れば、高砂の岩ふねの事もその名に託してむかしの事をしらしめんがためなるべし。

尾上

風土記残篇ニ曰、尾上郷土地上一肥、民一用不多出ニ。独一活柴一胡鳩鶉等ヲ、公穀九十九凡、飯一粟四十三凡ト云。今、尾上ノ郷なし。長田庄に属す。古今榮雅抄ニ云、後撰集素性歌

山守ハいはゝいはなん高砂の尾上の桜折てかさらん

此歌、詞書に花山にてよめると有。惣じて、山を高砂といひ、尾の

えを尾の上といふにハあらず。歌にしたがひ、おもひワくべし。播州は尾の江也。仮名おのえと書よしと云。按に、往昔、高砂といへるハ村里の名にはあらず。いさごの高く積れる所なれハ名とす。尾上といふも、山尾なる所なれハいふなり。しかれとも栄雅卿の云、蓋亦一説なり。因て云、何れの書にかいへり。臆記す書名追出。播州の尾の江ハ獣の尾のごとく婉曲なる入江なりと。○按に、加古湊俗ニ称ス、今津川、其末けものゝ尾のごとくまがれる形勢有リ。今、皆田圃となり僅に其朔羊さくよう、かたはかりを存す。山に依ていへば尾上といひ、江に依ていへば尾のえといふ。二説、相通る歟。

鐘

長三尺貳寸、周曲七尺七寸、厚壹寸九歩、経貳尺四寸貳歩、釈迦坐像二軀、笙簫箏笛等楽器の図及方四寸、蓮華三十六座有リ。花蒂悉く落て疤痕僅とに存ス。鐘釵竹筒八寸上に蒲牢の形を作れり。相伝、此華鐘鯨音数里に徹す、故に明石より揖保の湊迄の海上をひゞきのなだといふ。曾て海賊のためにゑられて、土佐浦足摺の崎迄行しかども、怪異有て本所に帰る。又、別所長治三木城にうつし、十二時を撞つ。別所家亡て後、再ひ本所に帰ると云。此鐘あまねく世のしれる所也。しかれども、正史実録には未考二得一。此鐘、所々転遷てんせんの故にや、天和、貞享の比迄大に卻有て、扇をさし入るゝにゆたかなりしが、かねにちぬるの術を不レ用して、いつしか其卻癒ひまひえてもとのごとし。

響灘

此ほとりの海浜をひゞきの灘なだといへり。忠見家集に遊女、
音にきく目にはまた見ずはりまなるひゞきの灘と聞ハまことか
其余、夫木、題林、袖中抄等に出す。しかれとも、鐘をむすべる歌を
見ず。予が聞見のたらざるなるべし。今、尾上の神社に有て神
物とす。むかしハ神祠に鐘はなかりしとなり。おもふに、此ほとりにいみ
しき精舎有しにや。今考ふべからず。

高砂増々抄終